

“夏が来れば思い出す” デンマーク、ドイツの旅

「♪♪♪ 夏が来れば思い出す はるかな尾瀬……」——幼いころから口ずさんだ懐かしい歌曲。この尾瀬を今月末、妻と初めて訪ねる予定を組んでいます。夜行バスが一般的なようですが、この歳になるときついので東京駅から新幹線で上毛高原駅へ。そこからバスで尾瀬ヶ原に行き山小屋に一泊という旅程。水芭蕉の季節は過ぎたようですが、ニコウキスゲの群落が迎えてくれるようです。

場面は変わって“夏が来れば思い出す”のは5年前の夏に訪れたデンマークとドイツの旅。6月初め「世界文学紀行」の一環として、デンマークでは『ハムレット』の舞台となったクロンボー城とアンデルセンの生家のあるオーデンセを、ドイツではグリム童話の舞台とゲーテ、ヘッセのゆかりの地を訪ね、さらにローレライ伝説を秘めたライン川をクルーズ船でくぐりました。



美しい建物の並ぶコペンハーゲンの港

新緑から深緑へ。ヨーロッパは一年で最も美しい時節。夏至に近いため朝4時には明るくなり外は夜も10時過ぎまで白んでいました。街には数百年の歴史が刻まれた重厚な建物が並び、地方に行けばどこまでも広がる田園と森と赤レンガの家々……シャッターチャンスにこと欠きません。そんな各地での思い出に残る出会いからいくつかをご紹介します。

「シェクスピアはハムレットの城には来ていない！」



コペンハーゲン中央駅から列車で北上すること約50分、ヘルシンゴー駅に到着しました。駅から10分あまり歩くと、バルト海の岸边にそびえるクロンボー城(別号エルシノア城=写真左)。入口にはデンマーク国旗が高く風になびいていました。

私は物語『ハムレット』のイメージを追ってまず父王の亡霊が出たという城の塔に登りました。そこから降りると展示室から教会へ、さらに薄暗い地下壕まで歩を運んだ。でも、母親の王妃との会話はどの部屋でなされたのか、ポーニアスが刺された事件現場はどこなのか等はわかりません。そこで受付に戻ると、その日の責任者らしい男性に聞いてみました。両手を広げジェスチャー豊かに話す氏からは予期もしなかった言葉が返ってきました。

「Nobody knows! (誰もわかりませんよ)」。氏の話しっぷりからは「そんなこと言ったって、そりゃ無理ってもんだぜ！」といった少々くだけた訳が合うでしょう。なんとも“名言”かもしれませぬ。

事前に調べてきた資料でも、実はシェクスピアは作品を書くのにこの城まで来ていないと述べています。となると架空の話の舞台がどこかはわかるはずがない。それでも、これまで書かれてきた訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もあります。観光地としてはそこまでサービスしないと期待に応えられないからなのでしょう。

前年に訪れたイタリアのベローナでも同じでした。『ロミオとジュリエット』が世界的に知られるようになってから、物語に合わせて舞台となった家やジュリエットが胸の内を吐露したというベランダが作られた、という説明を聞きました。物語あるいは映画が反響を呼びその舞台が観光地化するのはどこでもある流れです。

ともあれ、シェクスピアはデンマーク国民史をもとに『ハムレット』を書き上げ、このクロンボー城の名を不朽にとどめました。4大悲劇の中でも最も知られた作品であり、その主人公の性格や発した言葉の解釈については、長い文学史のなかで最も論議された、最も魅力的な人物の一人と言えるでしょう。

とりわけ人口に膾炙している言葉は” **To be or not to be, that is the question!**” です。さまざまに訳されていますが、最も受け入れられているのは「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か」）それが問題だ」でしょう。中世英語を翻訳できるような力は私にはとともありませんが、それでも再度、作品に目を通し、現場を訪れた自分としてはこの部分を次のように訳してみたい。

「何が真実なのか、何が嘘なのか、それを究めるのが最重要課題である」——これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは、本当の正義と真実とは何なのか、根本的な問いを投げかけていると思うのです。

アンデルセン博物館前で美少女達との遭遇



博物館前の庭でポーズを作る女子高生たち

が出てきたのです。と、受付の女性は入場券と案内パンフレットを私に手渡ししながら言ったのです。「じゃあ入場料はいいですよ」。なんとありがたい！館内はフラッシュなしの撮影もOK。“じゃあ、精一杯アンデルセンのことを日本でPRしなくっちゃ”なんて新しいカメラのシャッターを押したのです。

「東京からのカメラマン」——こんな言葉が意外な神通力(?)を持っていた話です。現役の特派員時代は、記事が主体で写真はプロの域には及びませんでした。でも今回の旅には思い切って一眼レフのカメラを買ってきました。

「ライン川クルーズもある。望遠レンズも必要だし！」と。そこで、アンデルセン博物館の受付に着くと自然のうちにこんな言葉

建物の外の写真を撮っていると、後ろから声がかかってきました。「撮って、撮って！私たちが撮って！？」。振り向くと実にキュートで可愛い美少女が8人ほどです。地元の高校生だといひます。声をかけてきたのは透き通るピンクのドレスを着た妖精のような少女でした。私は少し冗談を交えながら言ひました。

「いいですよ。撮ってあげましよう。こちらは東京からのカメラマン。もしかしたら美人の皆さんの写真は日本のどこかの雑誌の表紙に載るかもしれませんよ」ポーズを決めた彼女たちはとびきりの笑顔で私のレンズに収まったのでした。予期しなかつた出会い。楽しいハプニング。でも「写真を送ってください」と特に頼まれなかつたので、うっかり彼女らの住所を聞くのを忘れてしまつた。

あれから5年。みな成人してなかには結婚した娘もいるかもしれない。あまりにも可愛い写真なのでこのホームページでも何か所かで使っています。

ライン紀行

「ローレライ」伝説を偲びつつ



ライン川クルーズの船上のワンカット

遺跡として中世の面影を留めていました。(写真：右下)

3階建てのクルーズ船には100人ほどの観光客が乗っていました。移りゆく両岸の光景がよく見えるように、乗客の半分以上が3階（甲板）に出ています。直射日光がきつく甲板上は摂氏30度近く。それでも湿度が低いので汗をかくというほどではなく、上半身裸になって日光浴をしている北欧からの船客もいました。私はときどき自分の位置を移しながら、2台のカメラで移りゆく両岸の光景をレンズに収め続けたのです。

乗船して川を下ること1時間余り。流れの川幅が急に狭くなり、左に急カーブ、そしてまた右に回つた。右手の大きな岩山を半円の形で巡るように航行していく。一帯の流れは速く水深もありそう。かつては航行中の多くの船が事故を起こした場所だといひます。と、船内のガイド放送が5ヵ国語（独、英、仏、西、日）で聞こえてきました。

説明が終わると同時に聞いたことのある



スイスのアル

プスに源を發し、フランスの一部をかすめ、ドイツを南から北へ縦断、オランダを横断し北海へ注ぐ。全長1,233キロ。ドイツ国内を流れる川は698キロ。そのほんの一部の区間ながら、クルーズはライン川の特徴ある景観を満喫できます。近辺に古城が集中して残っているからです。川の両側の山の中腹には、あちこちに形も大きさも異なる城がそびえ、今は

懐かしい「ローレライ」の曲が流れ始めました。

小学校の6年か中学校の音楽の時間に習った歌です。曲は美しく、それから半世紀余りの人生のなかで自分もときどき口ずさんだこともあります。ただ、歌の意味や背景について授業で説明はなかったのでこんな伝説があるとは知らなかった。今あらためて歌の背景を知ってみると、歌詞の情景がそのまま眼前の情景にダブってきたのでした。



右側から左向こうに流れ下るライン川。「ローレライ」の歌が誕生した付近

ワールドカップ——タクシー運転手の辛辣な評価

ドイツ滞在の最終日、ゲーテハウスを訪ねました。私はホテルの前からタクシーを拾うと行き先を告げました。運転手は“お茶の子サイサイ”といった雰囲気ハンドルを握っていました。ドイツでは比較的少ない黒人の運転手。そのしぐさや英語の濁りが面白かったので私は話しかけてみました。

「母国はガーナよ。こんどのワールドカップには期待しているぜ！なんてたってアフリカが開催地（南アフリカでした）、地続きの舞台だからね」

そういえば帰国直後にはその試合が始まることになっていて、出発前の国内のニュースで話題にもなっていました。日本はカメルーンと対戦することになっていました。そこで、運転手に正直なところの勝敗予想を聞いてみたのです。

「そりゃあカメルーンが勝つに決まっているサ。だって実力が違う。点差はそんなにつかないだろうけど、まあ自分の予想では2-0だね。うちのガーナだってニッポンには負けっこないネ」——やっぱり身びいきの予想。そこで参考までに対オランダ、デンマーク戦の彼の“ご託宣”も聞いてみました。そしたらなんと・・・

「オランダは優勝候補、どれだけ点差がつくかなあ！？ デンマークの実力も日本の比ではない。まあこちらは5-0だネ」

なんと、ずいぶんナメたものである。少々癪にさわる返答だがここで“ワレ ニッポン代表”なんて思って反論をしても仕方がない。ここドイツだってサッカー王国、4年前の開催地だ。正直、彼の、また彼らの認識はそんなところかもしれません。それでもこの年の岡田ジャパンに期待を寄せて、私は翌日の帰国フライトに身を任せたのでした。



ゲーテハウス

（今年もまたワールドカップがやってきました。やはりドイツの強さは本物ですね。シエクスピア、アンデルセン、ゲーテ、ヘッセ、グリム兄弟についてのレポート、「ライン紀行」は「名作の舞台を訪ねて」のページにありますのでご覧ください）